

仙林寺だより

NO. 62
編集・発行
松田正貴

行事報告

秋のお彼岸

いつもながら、お盆が過ぎればあつという間に秋彼岸が参ります。春のお彼岸に比べ境内の賑わいも若干控えめではありますが、それでもお中日には縁日さながらの参拝者となりました。

恒例の「小さな美術展」、今回は「人間国宝 芹沢銈介展」を開催。平成五年から細々ながら続くこの催しも徐々に市民権を得たらしく、子供連れのご夫婦や学生らしき若い参拝者も多く見受けられるようになりました。古くはあらゆる芸術や文化の発信基地としての役割もあつたお寺です。芸術に親しむ入り口として楽しんで頂ければ何よりです。

さて、彼岸ついでに申しますとこの時期、お中日が秋分の日、文字通り夏と秋を分ける日と考えられます。季節の変わり目など申しますが、体調の不具合を訴える方が多くなるのもこの時期、特に今年は五月から七月末までの長雨が続き、またその後の夏の暑さもつかの間、急に訪れた朝晩の冷え込みが気になります。もの本によりますとこのような年は自律神経が失調しうつ病になる方がいつもの年より多いのだそうです。受け売りで恐縮ですが、その予防法として肉体労働やスポーツで筋肉を使う、また体を冷やせず食べ物や避けるなど身体を温めることが大切なのだそうです。

余談ついでに、仏教では病気の元は四大不調と説きます。四つの大とは、地大・水大・

火大・風大。地は堅さを相とするもの、水とは湿り気を相とし火は熱さ、風は動くことを相とするもの、単体ではなく、それぞれの不調が組み合わさることによって病が起るとされます。逆を言えば季節に応じてまた状況に対する気を調節する（単体を整える）ことで総体を見直す可能性も考えられそうです。仏の世界のお医者様薬師如来さまからのメッセージです。ご用心、ご用心。



改修が終わった庫裡

現職研修会

二十七から二日間にわたり曹洞宗の僧侶を対象にした研修会に参加しました。今回のテーマは「室内・住職学・檀信徒葬儀法」でした。

檀信徒葬儀法は、いわゆる檀家の皆さんのご葬儀の仕方を学習するのですが、葬儀の方を知らないでお葬式をしているの？との疑問の声が聞こえてきそうです。

また常々、同じ宗派のお坊さんなのになぜ

こんなにやり方が違うのか不思議に思っている方も少なくないのでは？。そこには古からのそれぞれの地域における伝統や習俗を取り入れ、正式とは言えないながらも折り合いをつけて執り行っている実情があります。そのような中、葬儀における細かな作法をもう一度学び直し、仏の世界への旅立ちをより安心に満ちたものにしなければならぬ、習俗との関係を大切にしながらも本来の形に如何に近づけるのか、伝統的な文化であっても日々研究や研鑽が必要なのは、仏教の世界も同じこと、自己研鑽の学習会としての意味合いがあります。ただ、テーマを見てわかるように室内・住職学、これまではあくまで室内、つまり学習資料などがあるわけではなく師僧から弟子に直接伝えられたもの、形や文章として残す性格のものではありませんでした。そこで古くから口伝として伝わる作法を正確にまた綿密にご存知の老師をお迎えし、理解を新たにしようというものです。

葬式仏教と揶揄される事が多い昨今の仏教ですが、細かなしきたりの一つ一つ、またその中で用いる法具すべてにお釈迦様の命が宿っている事実があります。儀式をおろそかにすることは、仏教の教えの根幹を揺るがすことと言っても過言ではありません。ハードの面は葬儀社にお任せするとしても、ソフト面は我々僧侶（プロ）の出番です。

それにつけても、こちら側の岸（此岸）から向こう岸（彼岸）へ渡す船頭の腕を磨く努力は必定、護岸工事で流れが急激に速くなつた川を安全に渡すには机上の計測だけでは測りきれません。そこには日々の精進に基づく経験則が大切。古風を習う心構えは容易ではないようです。

晋山結制ならし

二十八日、川俣町頭陀寺さんから来る十月七、八両日にわたり行われる晋山結制のならし（予行練習）に行つてまいりました。晋山式とは、お寺を呼称する時に、「一山（いっさん）」という事でわかるように正式に山（寺）に入る事、入山する事を明らかにする僧侶として一世一代の大法要です。



ところで、お寺のこうした法要もやはりその地域や修行した本山によつて、お作法に若干の違いがあります。その違いを調整するためにこの予行練習があります。またお寺の行事は言葉ではなくすべて鳴らし物と呼ばれる鐘や太鼓などの法具によつて進行されます。言葉のない世界、それだけに事前の打ち合わせが大切になります。禅宗の法要での禅僧の動きは、他の仏教各宗の僧侶からも特に美しいと評価されるのも、綿密な点検と、道場での日々積み重ねた修行によつて身についた作法が、見るものにとつて一糸乱れぬ姿として美しく映るのかも知れません。人は見た目が九割」という本がベストセラーになっていますが、見られ方も見る側も用はその目が養われてることが肝要、見た目で判断！はこれまた容易ではありません。

ひとじ

「ロハス」

「やっぱり手間隙かけると味が違うね！」
「茄子の漬物をめぐるある日の我が家での会話です。」

「材料費よりも手間代がね」

こちらには、先月、先々月とすでにお馴染みになりました仙林寺庫裡の普請、お支払いの段。何れにしましても掛けた分に応じた出来上がりということでしょうか。さて、「ロハスな」生活、環境、食事、生き方等々最近よく耳にする言葉です。このロハスとは健康や環境に配慮した持続可能なライフスタイルという意味だそうです。持続可能なところ、鍵でしょうか、いわゆる流行もので終わらせたくないというメッセージが込められているような気がします。



ところで、この様なライフスタイルを身近な体験を通して見直してもらおうという趣旨の番組がありました。陶芸・ハーブ・パン作り・アウトドアと毎回興味深く見ておりましたが、いづれも力むことなく適度に力が抜けていく感じが好印象でした。思わず「がんばりすぎない」「そんな言葉が浮かんできました。」「がんばらない」といえば、鎌田 實医師の著書が一世を風靡しましたが、文中、病院の廊下に掛けてあったのが知的障害をもつ女性が描いた「がんばらない」の文字。誰もがその前に立ち尽くす、なんという勇氣のある言葉！と続きます。とたく病んだり困ったりしている人を見ると「頑張つてね！」「つい口をついて出てし

まう言葉ですが、もともとは「我を張る」が語源。痛みを耐えている人や悲しみに打ちひしがれている方に「我を張つてね」は辛過ぎる一言でしょうか。

話が脱線しましたが、要は持続を促すのはほどほどが良いようです。ここでご登場頂くのが「ひと手間掛ける」という言い回し。人という字がご縁を介在することではじめて人間となるように、手数という縁が伴うことで手間となり、「ひと言」、「おひとつ」、「一入（ひとしお）」的な「ひと」もさしずめ枕詞のよう。

好きだから手を掛ける、喜びを感じるから続けられる、そしてその延長線上に環境に優しく健康的な生活を営むライフスタイル「ロハス」がある。と考えればどうでしょう。

番組の第九話が「禅（ZEN）」
坐る、食事を頂く、庭を掃く、寝る。普段何気なく過ごす生活の一場面それぞれを修行と確認することで、意識せずとも物や命への感謝の思いが湧いてくるものでしょう。感謝の思いを抱くことで、手（労力）も間（時間）も惜しむことなく、しかも無理なく継続できるものではないでしょうか、ロハスな暮らしなどというといかにも時代の先取り的ですが、禅的生活をしてさえいれば取り立てて特別な考えを持たなくても良さそうです。

「手間いらず」「手抜き」、お金さえ掛ければ、今が楽なら。同じ手間がらみでも逆に魅力的？に聞こえる言葉があるのも事実です。便利さのみをささやく声にはお互いに用心したいものです。